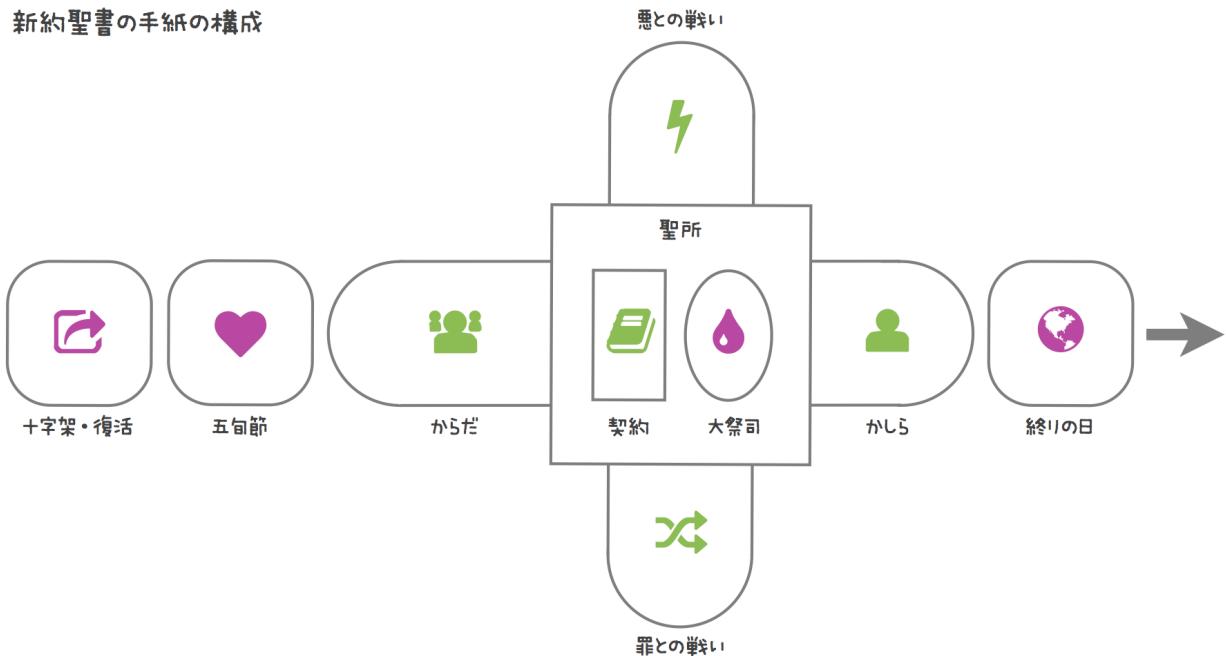


新約聖書の手紙の構成



新約聖書の手紙の構成

はじめに

ローマ人への手紙からユダの手紙まで、新約聖書には21通の手紙が含まれている。著者別、相手別に概ねまとめられているが、執筆時期、執筆場所はばらばらである。類型や目的によって分けてみても、どのように構成されているのかを知ることは容易ではない。

では、手紙の構成には深い意味はなく、すぐれた手紙の寄せ集めにすぎないのだろうか。あるいは、よく編集された一つの手紙集としてのなんらかの意義があるのだろうか。

この手紙の構成を知るカギは、モーセの契約にある。新しい契約の書物は、内容ばかりではなく、構成においても、古い契約の成就を表しているのである。

目次

- #1 21通の手紙の構成は？
- #2 モーセの契約が構成のひな型である
- #3 雄々しくあれ、右にも左にもそれるな
- #4 キリストと教会は一つとなる
- #5 栄光の望みに向かって

付録

聖書全図：はじめの天とはじめの地、新しい天と新しい地
(聖書全体の中での手紙の位置づけ)

【お読みいただける方へ】

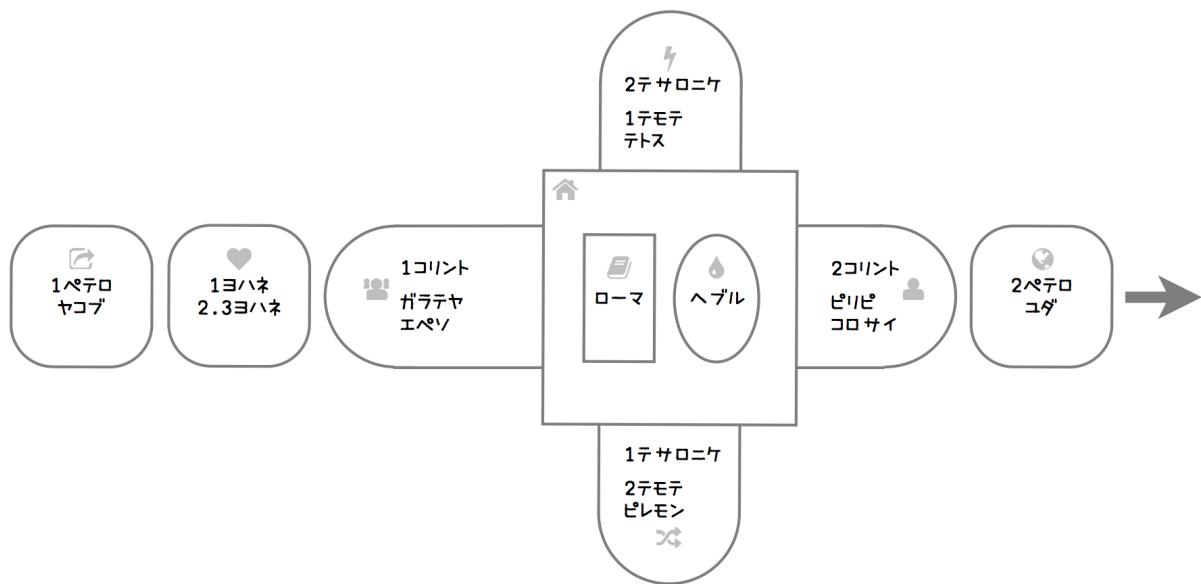
私たちカンノ家族が、聖書家庭教育をはじめて20年が経ちました。1994年、詩篇一週一篇の学びからはじめ、「くらべて読む」方法に導かれ、2006年からは、福音書にとりかかり、使徒行伝、新約聖書の手紙すべてと黙示録、創世記、そして、2010年には、再度、詩篇にもどって格闘。現在も日々くらべて読む毎日を送っております。

主からあふれるばかりの恵みをいただき、たくさんの発見をさせていただきました。聖書を断片的にではなく、まるごと読みたいとの願いに答えられ、聖書全体のあらすじマップができつつあります。「手紙の構成」もそのひとつです。

私たちの父なる神と主イエス・キリストから、
恵みと平安がみなさまの上にありますように。

+カンノカズヒコ

研究者： カンノ家族 (kannofamily@kanno.com)
初 稿： 2014.5.31
改 訂： 2014.6.10



#1 21通の手紙の構成は？

新約聖書の手紙は、パウロが書いた異邦人への手紙（ローマ人への手紙と12の手紙）と、ユダヤ人への手紙（ヘブル人への手紙と7つの手紙）との大きく2つに分けられる。

默示録21章に描かれている新しい都の幻の中で、その12の土台石には12使徒の名、12の真珠の門には12部族の名が書かれている。「地」の石には「漁師」の名、「海」の宝石である真珠には「地」の民イスラエルの名が記されることにより、ユダヤ人と異邦人がひとつになることが表されている。

ペテロにみわざをなして、割礼を受けた者への使徒となさった方が、パウロにもみわざをなして、異邦人への使徒とされた（ガラテヤ2:7-8）。パウロは、新しい律法であるローマ人への手紙と異邦人向けに12の手紙を書いて、新しい都の土台を築いた。ほかのすべての使徒たちよりも多く働き（1コリント15:10）、真珠のような使徒であった。

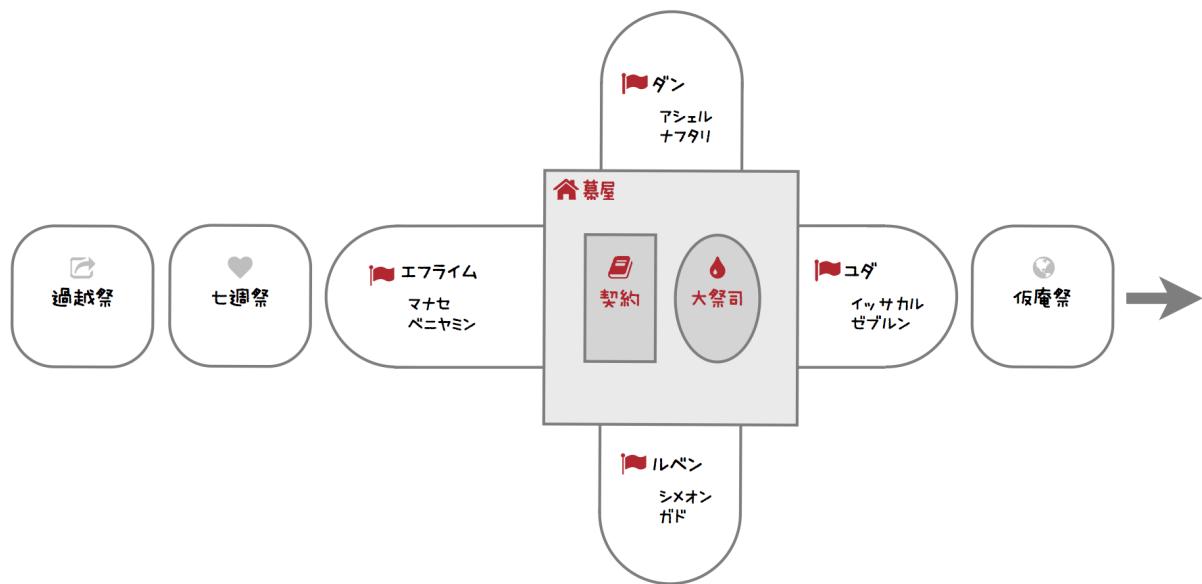
ヘブル人への手紙は、新しい大祭司と新しい都について教える。誰が誰に書いたのか明らかにされていないにもかかわらず、極めて栄光に満ちた手紙であり、まるでメルキゼデクのような、系図もその生涯の初めも終わりもない手紙である。この手紙を中心に、7つの手紙は、イスラエルの三大祭を連想させる。1月過越祭から、3月七週祭、7月仮庵祭へと、救いの完成への道が示される。

異邦人向けは12、ユダヤ人向けが7という手紙の数も、12はイスラエルの部族数、7は、すべて、あるいは全世界（70民族）を連想させ、交差して用いられている。

- ・大祭司と都 ヘブル
- ・新しい契約 ローマ
- ・かしら・御子 2コリント、コロサイ、ピリピ
- ・からだ・御靈 1コリント、エペソ、ガラテヤ
- ・内なる戦い 1テサロニケ、2テモテ、ピレモン
- ・外との戦い 2テサロニケ、1テモテ、テトス
- ・十字架と復活 ヤコブ、1ペテロ
- ・聖霊降臨 1ヨハネ、2ヨハネ、3ヨハネ
- ・終わりの日 2ペテロ、ユダ

テサロニケ、テモテの組は、内なる信仰の戦いと外との信仰の戦いを戦いぬくように励ます手紙であり、ヨシュアへの教えを思い出させるかのように右と左に位置している。「ただ強く、雄々しくあって、わたしのしもべモーセがあなたに命じたすべての律法を守り行なえ。これを離れて右にも左にもそれてはならない。それは、あなたが行く所ではどこででも、あなたが栄えるためである（ヨシュア1:7）」

手紙全体が、新しい大祭司であるイエスと新しい幕屋、そして、その中に義と愛の教えを抱いて、かしらなる御子とからだである教会が一つになって、終わりの日の望みに向かっていくように導く構成となっている。



#2 モーセの契約が構成のひな型である

十字架と復活によって、罪の奴隸、死の支配から連れ出され（福音書）、昇天された主が御靈を注いで教会を作られ（使徒行伝）、御靈とみことばによって導かれて（手紙）、終わりの日の栄光に向かっていく（黙示録）。

この新しい天と新しい地の創造のストーリーは、イスラエルの民が約束の地に導かれる、モーセによる出エジプトのストーリーにその型がある。

新約聖書の区分それぞれが、福音書は過越祭、使徒行伝は七週祭、黙示録は仮庵祭と、イスラエルの三大祭の成就として構成されている。手紙は、荒野で、幕屋を中心に進軍していくイスラエルの軍を連想させる。

「イスラエルの人々は、おのれのその部隊の旗のもとに、その父祖の家の旗印にしたがって宿営しなければならない。また会見の幕屋のまわりに、それに向かって宿営しなければならない。（民数記2:2）」

大祭司アロンを中心に、レビ族が幕屋を守り、12部族は、3部族ごとに東南西北に配置され、ラッパの合図とともに、栄光の雲にしたがって進んでいく。その中心には主の契約の箱がある（民数記10:）。

その契約の箱には、シナイ山でモーセが受けた十戒の板が収められている。その教えは、神の子らへの愛の教えであり、それを守るならいのちに至るという契約である。

新約聖書の手紙の中でも、ローマ人への手紙とヘブル人への手紙は、長さにおいても内容においても中心的である。どちらも、古い契約が御子において成就する宣言から始まる。

この福音は、神が、預言者たちにより、聖書の中で、あらかじめ約束されたものであって、御子に関するものである。
(ローマ1:2)

神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。

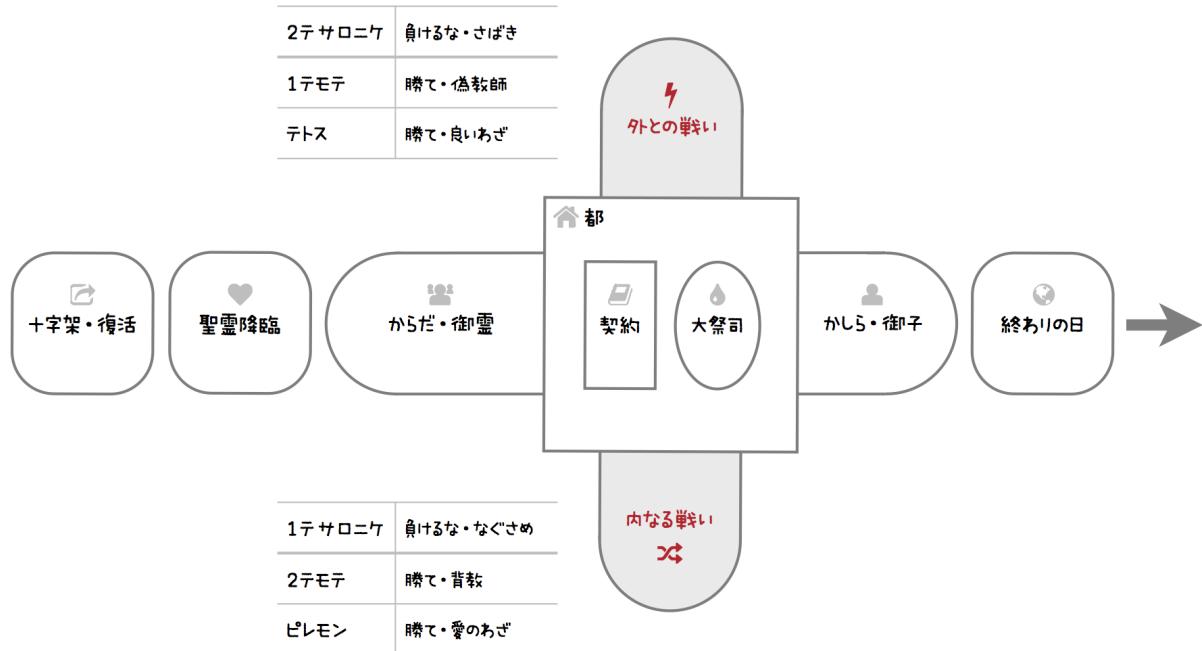
(ヘブル1:1-2)

ローマ人への手紙は、義と愛がテーマであり、申命記の教えと一致しており、新しい契約の律法である。

ヘブル人への手紙は、新しい大祭司と新しい都の栄光について語り、出エジプト記の祭司と幕屋の教えやレビ記のいのちの教えの成就である。

ローマ人への手紙とヘブル人への手紙という新しい聖所を中心に、12の手紙は、新しい民である教会の土台となっている。3部族ごとにリーダーの部族が1ついるように、3つずつの手紙も、1つと他の2つで組み合わされている（民数記2:）。

#3 雄々しくあれ、右にも左にもそれるな



#3 雄々しくあれ、右にも左にもそれるな

キリストと教会は、愛で結ばれ、ひとつとなって栄光の日へと向かっている。その一致を壊そうとする信仰の試練には、ふたつの側面がある。内なる罪の問題と外からの悪者の攻撃である。それは、兄弟の罪を赦し合い、悪者の試みから守られることは、主の祈りの5番目と6番目の課題である。

テサロニケの手紙では、1、2ともに、主のさばきの日が来る事を望んで忍耐するように励ます。1テサロニケは、苦難の中で愛し合うことから離れることがないように、2テサロニケは、患難の中で、不法の人にだまされることがないように教える。

「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの靈、たましい、からだが完全に守られますように。（1テサロニケ5:23）」

「どうか、平和の主ご自身が、どんなばあいにも、いつも、あなたがたに平和を与えてくださいますように。どうか、主があなたがたすべてと、ともにおられますように。（2テサロニケ3:16）」

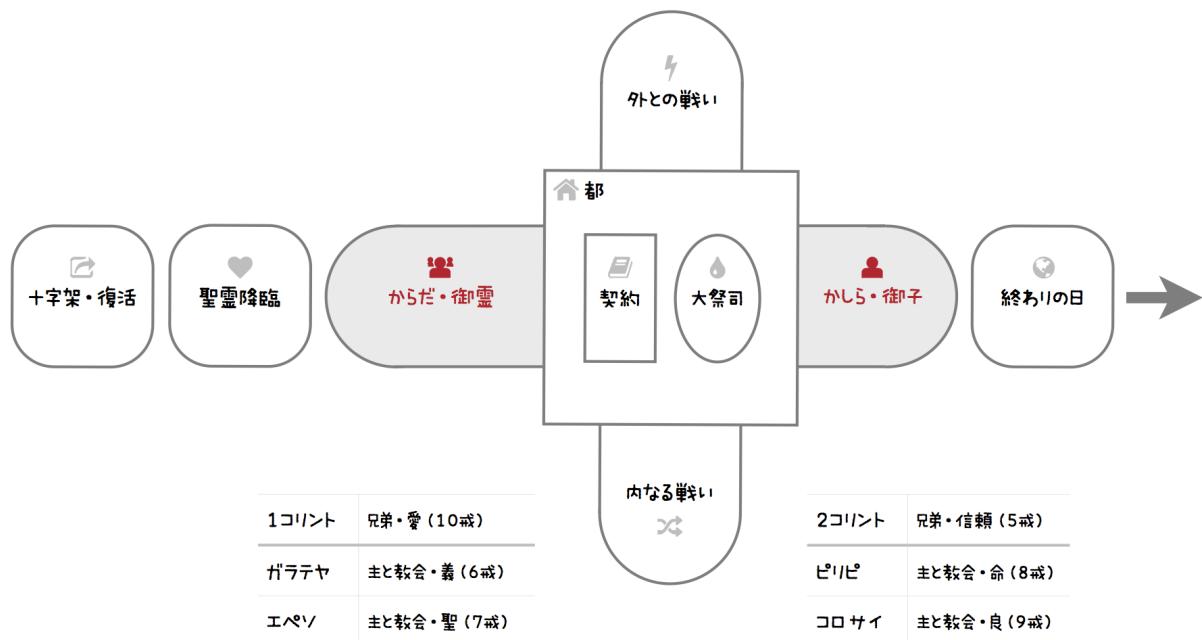
信仰をもって忍耐するなら、主の日に、平和がもたらされる。

モーセが、ヨシュアに、強くあれ、雄々しくあれと教え励ましたように、パウロは、信仰による真実の子ら（1テモテ1:2、テトス1:4）テモテとテトスを教える。また、同僚者であるピレモンに、獄中で生んだパウロの子オネシモを委ねる。

1テモテでは、偽の教えに騙されることなく、健全な教えにとどまり、2テモテでは、福音を恥とすることなく、信仰からそれることがないように教える。ピレモンでは、愛のわざを行うように、テトスでは、良いわざに励むようにさとす。内なる問題と外からの攻撃について語るのはテサロニケと同様である。

テサロニケの手紙では、荒野の民に対するように、信仰の戦いにおいて忍耐して負けるなど導き、愛する子たちへは、ヨシュアに対するように、強く雄々しくあって、敬虔に良いわざによって、攻め、勝利せよと命じる。

男、女、若者、老人、監督・執事、やもめの教えは、神の家でいかに行うべきか、神の家である生ける神の教会を、真理の柱、真理の土台として築くための教えである（1テモテ3:15）。右にも左にもそれることなく、勇敢に戦い、義の栄冠が授けられる日を待つ（2テモテ4:7-8）。



#4 キリストと教会は一つとなる

過越の祭りの前に、世にいる自分のものを愛されたイエスは、弟子たちに、その愛を残るところなく示され（ヨハネ13:1）、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるようにと父に祈る（ヨハネ17:22）。

信仰の戦いの中で試されるのは、愛の一一致である。心を尽くし、思いを尽くし、神である主を愛し、隣人自身のように愛せよという戒めに、律法全体と預言者の教えは要約される（マタイ22:37-40）。

コリント人への手紙では、キリストのからだである教会内の一一致、つまり、兄弟愛について教える。一方、ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイへの手紙の教えのめざすところは、キリストと教会が一つになることである。

これらの手紙の組は、十戒の第5から第10の戒めの適用となっている。「するな」ではなく「せよ」と肯定的に教えられる新しい判例法である。

1コリント：不品行と偶像に供えた肉（使徒行伝15:29）の問題を、愛をもって正しくさばくように導く。（第10戒：肉の欲を捨て、御靈に満たされよ。）

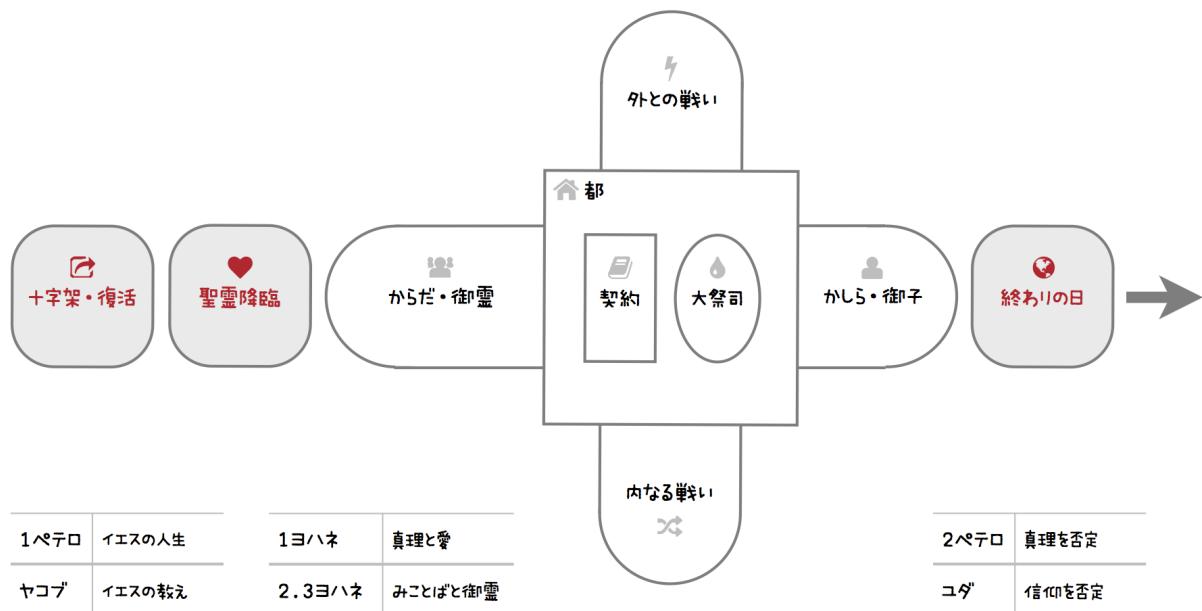
2コリント：献金の取り扱いなどを通して、教会の指導者に信頼するよう教え、労苦して弱い者を助けなければならぬこと勵ます（使徒行伝20:35）。（第5戒：父と母を敬え。）

ガラテヤ：モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、異邦人は救われないのかという最初の教会会議の問題（使徒行伝15:1）を取り扱う。割礼を受けているかいないかが大事なのではなく、大事なのは御靈によって新しく生まれることである。（第6戒：殺すな。御靈によって歩め。）

エペソ：主イエスは、教会を愛し、教会のためにご自身をささげた。それは、教会をきよめて聖なるものとし、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためである。（第7戒：姦淫するな。妻を愛せ。）

ピリピ：パウロは、投獄されても、福音を大胆に語り、喜びにあふれて賛美した（使徒行伝16:25）。主の十字架にならって互いにへりくだり、一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにすることが喜びである。（第8戒：盗むな。栄光の富で満たしあえ。）

コロサイ：万物を作られた御子は、神と和解させてくださった、教会のかしらである。主の知恵によって新しくされた教会は、互いに赦し合い、愛の帯を結ぶ。（第9戒：偽証するな。真の知識に満たされよ。）



#5 栄光の望みに向かって

7つの手紙は、イスラエルの三大祭を連想させる。1月過越祭から、3月七週祭、7月仮庵祭へと、救いの完成への道が示される。

奴隸の家から連れ出され、自由の地へ導き入れられる出エジプトのストーリーは、主イエスの人生において成就する。主イエスは、十字架と復活によって、ご自分の民を罪の奴隸から開放し（過越祭）、御靈と新しいことばを与え（七週祭）、恵みと平安の栄光に満ちた、終わりの日の完成（仮庵祭）に向かって導いていく。

1ペテロ：信仰の試練に耐え、救いの望みを抱いて敬虔に生きるならば、キリストの苦難と復活の栄光を証しすることになる。神の群れは、朽ちない種である神のことばによって新しく生まれ、主イエスの人生に従うように選ばれた。

ヤコブ：試練に耐えるように教えるところから始まり（主の祈り：試み）、兄弟の罪の赦しのために祈り合う命令で閉じられる（主の祈り：罪の赦し）、この手紙全体は、山上の説教（マタイ5:1-7:1）の知恵を実行することを教える。

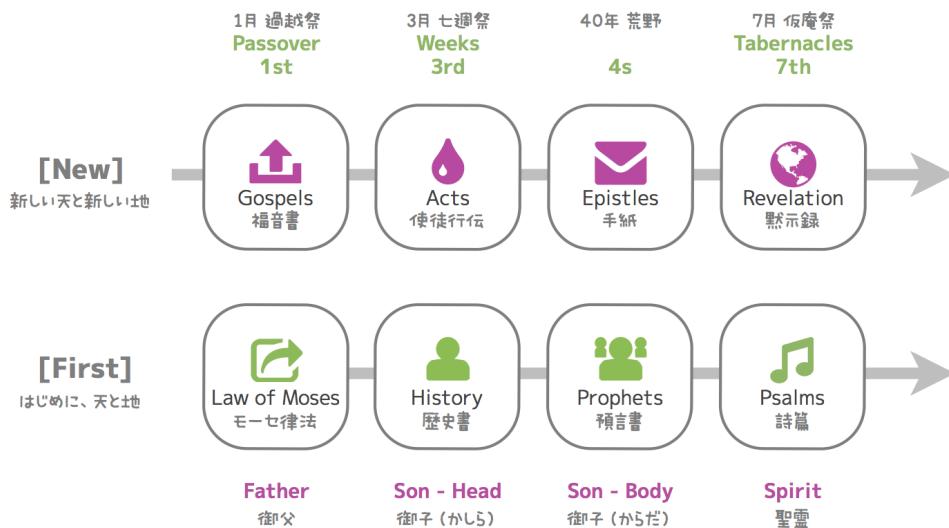
1ヨハネ、2・3ヨハネ：主が、最後の7日間に弟子たちに教えてくださった愛の教え（ヨハネ12:1-17）を、ヨハネも愛する子たちに教える。父から真理のみことばが与えられ（五旬節のみことば）、御靈による愛に満たされて（五旬節の聖靈）、キリストを否定する者（2ヨハネ）と、善に対して悪を行う者（3ヨハネ）と戦う。

2ペテロ、ユダ：不敬虔な者のさばきと滅びの日、終りの日が近づいているので、つまづくことがないようにと教え、主を待ち望むように励ます。2ペテロは、真理を否定するにせ教師、ユダは、欲望に支配された不信仰な者と戦うようにと書き送る。

主イエスがともにいる教会は、その教えにしたがって愛の一一致を保ち、主イエスとともに信仰の戦いを勇敢に戦う。

大いなる戦いのうちに、新しい天と新しい地が来る。新しい都の中心には、神と小羊の御座があり、中央を流れる川の両岸には、いのちの木がある。やみはなく、主の栄光が輝く。神はその日を祝福して、これを聖とされる。神がこの日に、そのすべての新しい創造のわざを完成されるからである。最後の書物、黙示録は、この大勝利の栄光の賛美で満ちあふれている。ハレルヤ。

私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。（ユダ1:25）



はじめの天とはじめの地、新しい天と新しい地

聖書は、時代を重ねて追記された複数の書からなる書の集まりで、主イエスが来られたのちに、ひとつの書物として完結した。

ヘブライ語で書かれている書は旧約聖書と呼ばれ、ギリシャ語で書かれている書は、新約聖書と呼ばれる。

旧約聖書には、はじめに、神が、天と地を創造されてから、メシアが来られるまでのことが書かれ、新約聖書には、神の子、主イエス・メシアが来られて、新しい天と新しい地を創造することが書かれている。はじめの創造と新しい創造である。

旧約聖書も新約聖書も、それぞれ概ね4つに分かれている。

新約聖書の中で「聖書…」という場合、主イエスが言われる場合も含めて、旧約聖書を指している。そして、「わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する。」と言われたように、旧約聖書を「モーセの律法と預言者と詩篇」と表現している。ユダヤ人の聖書の区分では、律法と預言者と諸書と呼ばれ、預言者は、さらに、歴史書の部分を前預言者、預言書の部分を後預言者との二つに分ける。

キリスト教では、主イエス・キリストが来られて、それまでの聖書（旧約聖書）に書かれたことが成就したと信じるので、新しい契約の書物として、新約聖書と呼ぶ。

新約聖書は、主イエスが来られてから十字架にかかり復活するまでが書かれた福音書、主が天に昇り聖霊が与えられることを書き記した使徒行伝、教会を御霊のことばで導く手紙、そして、主イエスの大勝利とその妻である教会との結婚を賛美する黙示録の4つの部分で構成される。

この新約聖書の4区分は、旧約時代のイスラエルの祭りの型の成就である。主イエスが神の小羊として過ぎ越しのいけにえとなり（過越祭）、初穂として天に昇って聖霊を送り（七週祭・五旬節）、40年の荒野の時代を御霊とみことばによって導き、新しい天地に安息をもたらす（仮庵祭）。

一方、旧約聖書の4つの区分は、新約時代に明らかにされた奥義である、神は父と子と御霊なる三位一体の神であることが、その概略を成している。御父は、モーセを通して教えを与える。次に、神の子であるべき王が、神を信じるのか神に逆らうのかが歴史書に記録され、さらに、預言者のことばを通して神の民が導かれる。詩篇は、賛美と御霊の歌である。

旧約聖書：父・子・子ら・御霊

新約聖書：長男・弟（弟子）・兄弟たち（教会）・ハレルヤ

神は、神に似るように、神のかたちに、人を造り、キリストに似たものになるように新しくしてくださるのである。